

與倉 豊(静岡大学大学院人文社会科学領域准教授)

産業集積のネットワークと イノベーション

古今書院 2017.1. 3, 320p.

日本でも産業集積論の論稿がすでに随分と発表され、それなりに研究蓄積も進んできた。そうした中で、ネットワークとイノベーションとの関係領域に産業集積の概念を適用する本書は、わたしたちの中小企業研究との関連においてどのような意味をもつのか。まずは、構成(目次)を紹介しておこう。

- 第1章 産業集積論の理論的・実証的課題
- 第2章 ネットワーク論の再構築
- 第3章 イノベーション研究の新展開
- 第4章 研究開発ネットワークと地域イノベーション
- 第5章 地域イノベーションの要因分析
- 第6章 産業見本市と産業集積—長野県諏訪圏工業メッセの事例
- 第7章 産業集積とネットワーク進化—静岡県浜松地域の事例
- 第8章 産業振興と制度的なネットワーク構築支援—九州半導体産業の事例
- 第9章 都市間結合と企業内ネットワーク
- 第10章 グローバルな知識結合と企業間ネットワーク
- 第11章 産業集積・ネットワーク・イノベーション研究の課題と展望

與倉は産業集積論については、従来の経済地理学の範囲をこえて、新しい「空間経済学」からの視点を重視するものの、産業集積の発展・成長メカニズムを単に「産業集積内での外部性」によってのみ説明することに疑義を挟む。むしろ、「産業集積内の発展・成長に影響を与えている」さまざまな関係性に與倉の関心と分析の中心がある。産業集積への影響要因としての「ネットワーク」と「イノベーション」が分析対象とされる。ネットワーク論については、與倉は「ネットワーク概念そのものが指し示す分析領域は広範にわたるものであり、研究者間でコンセンサスは未だ存在していない」ため、ネットワークは魅力的な概念であるものの、その曖昧さゆえにかえって混乱した議論をもたらしていると批判的である。評者もこの点に共感する。與倉の提案は、ローカル、ナショナル、グローバルという3つの空間概念からネットワーク形態を整理することにある。経済地理学者である與倉は、単位経済空間からのアプローチではなく、企業間関係における信頼性、協調・協働性などを含めたより総合的なアプローチを提案するが、中小企業研究者にとっては御馴染のとらえ方でもある。ここでは内外の産業集積論とネットワーク理論の要約的紹介が行われる。

イノベーション研究についても、與倉は先にみた3つの空間的次元、ローカル、ナショナル、グローバルの次元から内外の研究蓄積を要約紹介する。産業集積との関連で重要なのは、集積内の卓越する産業の違いにより、「組織間の関係性の地理的な発現形態も異なり、多様な空間的次元でイノベーションが起きる」ことへの着

目である。ローカルなイノベーションについては、地域内だけではなく内外の研究開発におけるネットワークのあり方が大きな影響をもつのはいうまでもない。本書では、地域新生コンソーシアム研究開発事業を事例として、社会ネットワーク分析による数量分析結果が示される。與倉も指摘するように、課題はフォーマル関係だけではなく、インフォーマルな知識交換などをどのように数量分析手法に取り込めるかである。また、すべての産業集積が成長しているわけではない。では、成長や停滞にどのような要因が関わっているのか。さまざまな理論が提示されても、何が実証的に証明できるのか。ネットワークの形態とイノベーションとの関連性については、與倉自身は地域のもつ本来的なポテンシャルに関心を示し、それをどのようにモデルに組み込めるかに関心をもっているように思える。

本書の事例研究面では、長野県の諏訪地域が分析の俎上に乗せられている。中小企業研究者によっても、同地域は精密機械とその関連企業の集積地として多くの論稿も発表されてきた。諏訪はかつて養蚕業の中心地の一つであり、その後、工業地域へと発展してきており、精密機械工業以外にも食品などの産業も立地している。與倉の関心は、諏訪地域の工業メッセによる集客を通して「産学連携」と「産産（企業間）連携」効果であり、積極的な評価を下している。二つめの事例紹介は、静岡県浜松地域である。與倉が着目するのは単にフォーマルな関係だけではなく、インフォーマル・ネットワークの存在とそれへの支援体制の存在である。確かに、浜松にはかつてのテクノポリス構想の下に、研究会、異業種交流会が数多く組織されてきた地域の一つである。今後の展望について、

與倉は関係機関への聞き取り調査を行っている。中小企業・中堅企業中心のネットワークが盛んな浜松の今後については、他地域のように高い技術や情報をもつ大企業の参加を求め、大企業の資金面や人材面の提供によるオープン・イノベーションの創発を期待する声を紹介している。この面については、他地域の実情などの経緯なども具体的に分析される必要があろう。三つめはシリコンアイランドの九州半導体産業である。同地では、半導体実装技術の情報を発信して取引拡大を目指した国際ワークショップが2001年から開催されている経緯がある。ワークショップを通じたビジネスマッチング事業が評価され、今後の展望として九州内外・東アジアの半導体事業が結びつくことで、さらなる集積形成への期待が述べられている。

国内都市間の結合と企業内ネットワークとの関係は、後者については中小企業研究者の論稿も多いものの、都市間結合を意識した研究は少ない。経済地理学者である與倉の視点の特徴であろう。與倉の分析対象は、メーカーの異なる地域の複数事業所配置である。他方、グローバルということでは外資導入企業の技術導入、資本提携、合併企業の設立などの要因を取り上げ、導入先諸国との関係性が分析されている。最後に、評価である。本書は、與倉が発表してきた論稿を収録して、最後の結論部分を書き下ろした構成となっている。産業集積理論やイノベーション理論を紹介するとともに一重複も多いが一、数量分析を用いてその妥当性が検討されているところに特徴があり、大いに評価したい。與倉の今後の最大関心は、産業集積やイノベーション過程の分析を通じての一層のネットワーク研究であろう。残された課題は、與倉自身が最終章にあたる第11章で列記しているの

で、評者自身が気になった点のみにふれる。一つは個別事例の深化である。経緯などをよく知る関係者へのアプローチが重要である。二つは、イノベーション概念の曖昧さであり、イノベーション概念は分野により一律ではない。特定分野に絞って分析を深化させていくことであろう。いずれにせよ、これからの研究の深化に期待したい。

(中京大学経営学部教授 寺岡 寛)